

開催報告

令和 6 年 11 月 8 日（金）13:30-15:00、研究大学コンソーシアム「学術情報流通の在り方に関する連絡会」の主催により学術情報流通に関する連続セミナー（第 6 回）「学術誌・データのオープン化、質、逃れられない曖昧さと実践的アプローチ」を開催しました。

大阪大学 感染症総合教育研究拠点/社会技術共創研究センター（ELSI センター）の井出和希特任准教授を講師に招き、学術誌の特徴が多角的に解説され、単純に良悪の判定はできないことが示されました。さらに、オープンアクセス誌出版の一般化とともに問題が顕在化したプレダトリージャーナル（論文掲載料収入を目的とし、十分な査読を行わない等の問題を含む粗悪な学術誌）に対するさまざまなアプローチが紹介され、学術誌の質の判断や関係者間での丁寧なコミュニケーションの必要性について詳しくご説明いただきました。

自然科学研究機構の小泉周特任教授によるファシリテーションで行われた質疑応答は、会場・オンラインから、プレダトリージャーナルに対する大学や大学図書館の対応、出版社の取組等により学術誌自体が変容し続ける状況下での評価のあり方など、多種多様な質問や意見が寄せられました。

講演終了後に会場で開催されたアフターセッションには、対面参加者の大部分が参加し、講師を囲んで活発な意見交換が行われました。

■参加者数 246 名（対面 21 名、オンライン 225 名）

■アンケート結果 回答数：93

○職種

大学職員（図書系）：65 URA：14 大学職員（研究推進系）：8 大学教員・研究職：3
出版関係者：2 その他：1

○機関

国立大学：72 私立大学：10 公立大学：4 国立研究機関・官公庁：4
民間企業：2 その他：1

○セミナーは参考になりましたか

参考になった：71 まあ参考になった：21 あまり参考にならなかった：1

○ご意見・ご感想 ※公開の同意をいただいたものです。

【URA】

- ジャーナルが時間とともに変化するためステレオタイプで判断してはいけないという

考え方が非常に勉強になりました。

- 大変参考になりました。なぜその学術誌に投稿するのか／しないのかの言語化、ウォッチリストに頼りきりにならないべき、に納得しました。最新の情報も示していただけて、ありがたかったです。
- セーフリストに対する考え方、プレダトリージャーナルへの処仕方など大変参考になる知見を得ることができました。

【大学職員（研究推進系）】

- 研究データの管理・利活用において、リソースと相談しながらどこまで環境整備できるかが、研究時間の確保にとって要になると感じた。
- 講演タイトルにも書かれていましたように、単純に二値化すべきでない、曖昧さを抱えざるを得ない課題であることがよくわかりました。一方、Slidoの質問にもあがっていましたが、現場実務では「てっとり早く」処理するために、ブラックリスト・ホワイトリストを求める傾向が強まっているのも事実です。この点については「関係者間での対話」がさらに深まる必要性について質疑応答で何度も詳しく語っていただけたことが良かったと思います。時間的にも全体的に進行もスムーズで、ストレスなく参加できましたが、質疑応答では、ファシリテーターの方の意見や感想よりも、Slidoの質問を「原文ママ」で講師に投げかけてくださった方が、多くの参加者の納得感につながるように思います。

【大学職員（図書系）】

- 多角的な議論がなされており、大変参考になりました。
- 論文の質を二値的に考えることの危険性を把握した一方で、実務上はどうしてもある程度端的に客観的に判断していくために数値化・リスト化せざるを得ない部分があり、ジレンマを感じた。図書館側から研究者側に呼びかけるのはハードルが高いように感じてしまったが、広報等の呼びかけを少し変えるだけでも違う、というコメントがあったように、研究者自身の意識改革の一端を担うために、少しでも工夫できることがあれば実践していきたい。
- 学術誌の質の評価が、一筋縄ではいけないことが確認できてよかったです。とはいえ事務屋の立場からは、グレイな部分が増えれば増えるだけ、判断に時間がかかり、効率化からは遠ざかるので、どうしたものかなあ〜と悩ましいところです。
- 結局は研究評価の問題であろうかと考えました。論文の数や掲載雑誌のIFで業績を評価する文化が続く限り、何かしらの方法で評価をハックしようとする出版社（および研究者）はいなくならないのでしょうか。
- 現場で迷うことが多いテーマについて、分かりやすく解説いただきありがとうございました。関連資料も大変参考になります。

- 大変参考になりました。即時 OA の広報と合わせて粗悪雑誌の見分け方の情報もお知らせしたいと思います。
- 単純にハゲタカかそうでないかは判断できないし、していいものではない、というお話は当たり前ですがとても重要な観点でした。一方で、APC 支援にしてもどこかで線引きをせざるを得ず、どうしても「判りやすい・判断に迷わない」基準を求められることがあるのかと思います。投稿判断の言語化は必要だしぜひやっていただきたいと思いますが、それを求めてしまうと先生方のご負担が増えそうで、悩ましいと感じました。
- いわゆる「ハゲタカ」の用語の使用やリストの扱いも含め、従来の視点ではとらえきれずこぼれていた問題を言語化してくださっていると感じました。学術誌や論文の本来的な質を議論するきっかけになるよう、周知していければと思います。
- 資料として紹介されていた『<翻訳>粗悪な学術誌・学術集会を拡げないために』は大変参考になりそうです。ありがとうございました。
- 「二値的な判断をしない」と繰り返し、言われていたことが印象的だった。チェックリストは価値判断を含まない「ウォッチリスト」がよいのではないか。
- 粗悪な学術雑誌について、教員から問い合わせがくることも多く、こちらとしても対応に困っているところでもあり、非常に参考になりました

【出版関係者】

- 研究者側からの Predatory journal についての見解を聞くことができた。一度そのようなジャーナルに論文掲載すると評価に影響されてしまう事は、論文そのものの評価がなされず、活用法を得られる機会を失ってしまう根深い問題なのだと知った。判断を二値化せず、粗悪となった原因や背景、その後の対応などを含めた情報を知る事が研究者も支援する側も必要なのだと感じた。

○今後、セミナーで取り上げてほしいテーマ ※公開の同意をいただいたものです。

【オープンアクセス関連】

- 教員に対して、オープンアクセスへの協力や理解を求めるときにどんなこと（方法）をいえば届くかどうか
- オープンアクセス関連での他大学様の事例や大学における方針・方向性等
- 海外における機関リポジトリの活用、研究データの共有、データジャーナル
- 即時 OA 方針が想定している、研究データが利活用される世界の姿
- 研究データの公開に関すること
- 「あらゆるオープンアクセス論文がすべて生成 AI に取り込まれたとき、どのような学術研究環境が実現できるか」「公開されている研究データセットもすべて取り込んだと

き、どのような世界が現出するか」夢のある（悪夢かも知れませんが）お話をいただけると嬉しいです

- オープンサイエンスモニターの動向について

【その他】

- 井出和希さんの別テーマでも話を聞きたい
- 公開査読の意義
- 質疑応答の際に、「査読の限界」について言及されていましたが、学術雑誌の査読の展望についてお聞きしたいです。
- 転換契約の実情について

写真



